ひかりのこ

光の子

No.69　1996. 12. 25.

● 主の名によって語り行え（コロサイの信徒への手紙第３章17節）

クリスマスの豊かな祝福を
お祈りいたします
社会福祉法人　光の子どもの家

みんなで飾りました

え・中島英子

愛の灯

ひもじさはたとへば神の寒さとも
先生のサンタクロースすぐわかる
クリスマスツリーみんなが光りの子
クリスマス星より降らす鈴の音
聖夜劇星になる子と木になる子
雪像は聖ニコルスを表象す
歳晩の愛の灯高くかかぐべし

落合　水尾　（『浮野』主宰）

発行／社会福祉法人 光の子どもの家　ＴＥＬ／0480－72－3883　振替／00130－１－128022
編集／光の子 編集委員会　〒349－11 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／社会福祉法人 共愛会

博士ら来り拝す

マタイによる福音書　第２章１～１２節

理事長　福島　勲

イエスの誕生のとき、東方から博士が来て拝した。下世話に三人の博士と言われているが、三人という数は聖書のどこにも記されていない。

献物が三通りあって、三人によってそれぞれ献げられたとして辻褄を合わせたのだろうか。

アルタバンは「もう一人の博士」という物語を書いた。途中あわれな人を助けたりして、もうひとりの博士は一行から遅れてしまったというのである。

さて、五人目の博士という劇をかくとしたら、あなたはどのような博士をかくだろうか。

第五の博士は、もちろん異様な星をみたが、イエスの誕生には関心がない。また幼な児を礼拝するなど以ての外といって、一行には同調しなかったとする。

あり得る筋書きと思われる。

友人のO君は優秀で器用、何でもこなし、すること為すこと可なざらるなしという羨ましい限りの男である。ある時、しみじみと「もう少し頭がよかったらな・・」と残念がった。私は「それで十分だ。それ以上よく出来たら傲慢になるぞ」と慰めとも、たしなめるともつかない言葉で応じた。

といって私とて同じ思いである。もう少しましな人間だったらなと嘆かざるを得ない。が思いなおす。

さきごろ亡くなったハンガリーの数学者ポール・エルデスのように百人の電話番号を暗記していたという頭脳の持ち主とまでいかなくても、もう少し冴えていたら、果たして自分はどうなっていたかわからない。傲慢でさきの第五の博士の道を辿るのが落ちであろう。

昔、東京高等師範学校の学生と第一高等学校の学生とのテニスの親善試合をみたことがある。

高師の方が得点すると一高の学生から「俺が文部大臣になったら、お前は馘首（くび）だぞ」と弥次っていた。その可能性があるだけに、冗談まじりのヤジとは思いながら心なしか潜在意識がうかがわれて嫌な思いがした。

清水市の龍華寺に葬られている高山樗牛の文に馬鹿になれというのがあったように思う。トルストイもイヴァンの馬鹿を書いた。

馬鹿だけでは得をする世の中でないことは確かであるが、さげすまれて蔑まず、笑われて笑い返さず、偽って悪を働かず、謙虚で尊ぶべきものを尊び、拝すべきものを拝する馬鹿こそ真の馬鹿で、これこそ真の賢者の道に通じるものである。

聖書では、最高の学識者の東方の博士らと、無学と思われるイスラエルの野に羊を飼う人々が、真っ先に誕生したばかりのイエスを拝礼にきたと記している。

これは聖書記者の聖誕劇の作意的構成ではない。神の織りなした教訓的出来事である。

全人類に、老いも若きも、男も女も、富める物も貧しい者も、知者も無学な者もすべて一様に神の前に、キリスト・イエスの前に敬虔に頭を垂れよとの教えである。

もう少し頭がよくて、同僚や社会で頭角をあらわしたとしても、神に対して傲慢不遜に振る舞っては、神の創造の秩序を乱す者である。

今や人知が進み科学が進歩した。そして、科学兵器が人類、世界を滅亡に陥れそうな気配である。

バベルの塔は言語の混乱をまねいた。ギリシャ神話のイカロスの翼は高く飛翔して得意の絶頂で太陽の熱に蝋が墜落してしまった。

シエクスピアは、人々はみな泣きながらこの世にやってきたと、悲劇の王リアに言わせている。

悩み多い世にあってクリスマスを真実に祝える者こそまことに幸いなる者、泣いて世に来とて、笑って世を去ることができるだろう。

■エッセイ■

うたの贈りもの

県立高校美術教諭　中島　睦雄

私は「野菊」や「たなばたさま」などの曲で知られる作曲家下總皖一を顕彰する仕事に、たくさんの仲間たちと関わっている。そんな関係でついこの間、TVのディレクターから電話があって、作曲家の生誕の地大利根町をあちこちと案内してくれという依頼を受けた。

一週間程して、六、七人の撮影隊がやって来た。そこで、下總皖一の二千点以上もあると言われる遺品や資料を見てもらったり、「野菊」や「たなばたさま」のメロディーが流れる橋を撮ってもらったりした。また、保育所の七十人の子どもたちが、下總皖一の曲をうたってくれるというので、みんなして保育所に出かけて行った。

強い西風が吹いていた。子どもたちは半そでに半ズボン。まるでこの寒さを知らない様に、元気に一行を迎えてくれた。

「遠い山から吹いて来る　小寒い風にゆれながら　気高く清くにおう花・・・」子どもたちは力いっぱいにうたってくれた。素晴らしい声だった。澄んでいた。いかにも子どもらしい素朴さが溢れていた。無心だった。音楽的に訓練されたきれいなハーモニーでは決してない。私は、私自身の心の奥に潜んでいた少年の心を呼びさまされて、いつの間にか楽しくなっていた。

子どもたちは、ただあたり前にうたっているだけなのかも知れない。しかし、邪心のない歌声は、人の心を揺り動かす。

複雑な社会の中で、我々おとなたちは、生きる為に戦い、生活に疲れてしまって、どうかすると、あの澄んだ素朴な心を失いがちである。子どもたちは、美しい言葉で作られた詩を、美しい曲で歌うことによって、美しい、優しい心を育んでいるのかも知れない。そしてその優しさを歌うことによって人々に伝えているのかも知れない。人生の垢にまみれた私にも、こんな時代があったのだろうか。

カメラマンの肩の上にあるレンズは、終始子どもたちの表情を、一貫して冷静に追い続けている。ディレクターのSさんは、子どもたちの歌が終わってしまっても、じっとうつむいたままだった。「すごいなあ、感動しちゃたよ」と小さくつぶやいたその目には、涙さえ浮かべていたのだった。そしてまた、「うーん」とうなっていた。

その日から三日後に、私は全国童謡唱歌サミットという行事に下總皖一を偲ぶ会の仲間たちと参加した。夜のレセプションで急に私もスピーチをする機会が与えられた。私は何を話して良いか戸惑ってしまったが、苦しまぎれに、童謡につながる一つのエピソードを思いだし、それを話してみた。

もう十年も前のことになろうか、私が家に帰ってみると、家内が玄関の所に立っていた。「どうしたの」と聞いてみると「今ね、光の子どもの家の子どもたちと先生がきてくれたの。」と言うのである。

先生は、私たち夫婦のした些細な事に対するお礼を述べられた。後について来た子どもたちが、玄関の前に一列に並んだので、家内がびっくりしていると「お礼にみんなで歌を歌います」と言ったので、またびっくり。小学校の低学年からまだ一年生にもなっていない子どもたち七、八人は、目を丸くしている家内の方に向かって元気に歌を歌ってくれたのである。背の高い子も低い子も、声を合わせて、全身全霊で歌っている。そこにはなんの技巧もない。底知れない子どもたちの純粋さだけがほとばしっていた。

家内は、子どもたちのうたう歌の力に胸を打たれ、溢れ出る涙を止めることができなかった。「どうも、ありがとう。」と言うのがやっとだった。

この事によって家内は、ほかの何にも増して素晴らしい贈りものを子どもたちからもらったのである。

サミットのレセプションで、私はたくさんの人々の前でこの事を話してみた。

その人たちの中に、私の話を聞きながら小さくうなずいてくれている人がいるのを、私は見つけた。

2つの文化に生きる
3

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー　京　子

「仲の良い友だちと仲間割れしたくなければ宗教、政治の話をしないほうがいいよ。」と学生の頃、誰かに言われた覚えがある。私はその時「あ、そう?」と軽く交わしたのだが、後々よく考えてみるとこれは一面、寂しい事である。思えば私がアメリカ留学していた頃、一番仲良くなったベトナム人のザオとエクワドル人のジャッキーとは一度も政治や宗教の話をしなかった。二人の会話の中では一度も聖書だの教会だのといった言葉が出てこなかったのでたぶんクリスチャンではないだろう、とその程度しか分からない。ベトナム人のザオとは今も年に一、二回だが手紙をやり取りしている。本当に良い友だちだが、今だに彼女がどんな宗教を信じて生きているのか分からない。政治、宗教、特に宗教はその人の生き方、考え方すべてを左右しているものだけにとてもデリケートで触れにくい話題だ。

最近、知る人ぞ知る本『脳内革命』を書いた春山茂雄さんの講演会を聞きに行ってきた。彼が言うには「長生きの秘訣はすべてプラス思考」ということだ。私は取り分け人より長生きしようとは思わないが、生きられる限り充実した日々を送りたいと思っている。

私にとってクリスチャンでいることイコール、プラス思考そのものなので春山さんの考え方には共鳴している。春山さんいわく、「宗教とはコミックのようなもの。」それを聞いた私は内心、（えーコミックってあの漫画のことかしら）春山さん、「そうです。漫画です。世の中には真理があるけれど私たち一般人には、なかなかその真理が見えない。だから宗教という分かり安い漫画でその真理を説いているのです。」いろいろな宗教があるのはその人に分かり安い道が選べるようにされているから。（オウムのような新宗教は別として昔からあるもの）私はキリストも釈迦もりっぱな人だと思っている。」ということだった。最初、漫画と聞いた時はなんてふざけていると思ったが、真理を知るための分かり安い道、その人に合っている道というのを聞いてなるほどと思わされた。

私がクリスチャンになるずっと前からクリスチャンでいる叔母がいる。

ある夏、例年の如くお盆で親戚が集まって、お坊さんのお経を聞いていた。足もしびれ、長々と続いたお経が終わり、ホッと立とうとした時、後ろにいる私をふりかえって「讃美歌の方が私には心に響いてくるんだけどね」と小声で言った。私は思わず吹き出してしまったが、その後何年かして私もクリスチャンになって日曜毎に教会に行き、讃美歌を歌う度に「ああ、なんて美しいんだろう」と心を洗われる経験をしている。これは理屈ではない。「真理を知るために分かり安く一番素直に入ってくる道、それは宗教」という春山さんの話に合っていると思う。

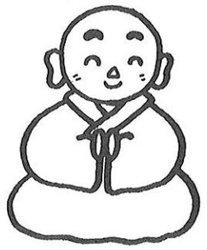
ここ数年毎年夏はアメリカに一ヶ月ほど帰っていたが、今年の夏は子どもたちの行事があったりして冬休みまで見送ることにした。そのかわり私の三重県の実家で家族四人、二週間程のんびりと海、山、川で寛ぐ時が持てた。

八月と言えばやはりお盆、先祖八代続いている実家は恒例のお寺参りがある。夫は来日した頃はお寺には絶対行かないと言いはっていたが、最近になって何も言わずにすっと親戚の集まりに入ってお寺に向かうようになった。三十分ほどのお経も座布団に座って黙ってきいている。お香もあげるが合掌はせず先祖の位牌に会釈する。

私は私でクリスチャンになった後も家の行事を拒否するつもりはなく、お経を聞きながら（これはジャパニーズクラシックミュージックなのだ）と自分に言い聞かしている。

先日、お寺参りの心境を夫に聞いてみた。すると夫は、「以前は、クリスチャンだし、外国人だしお寺参りは居ごこちの悪いことばかりだと思っていた。けれど最近は見方が変わって日本の家族と文化への尊重のつもりでお寺参りをしている。」ということだった。

人間、年を重ねる毎にいろいろな面から物事を受け止められるようになるのは、恵みだと思う。



学者もどきのつぶやき ㉕

真夜中の想いはめぐる

山形大学医学部教授
仙道　富士郎

トイレに行ったとき柱時計を見ると午前二時三十分、七時半の新幹線に乗って学会に出かけなければならないから六時起床。いくら頑張っても眠くなる難しい本を読んだとしてもたかだか三時間の睡眠、いや、もう眠ろうとがんばることは止めにしよう。どうせ電車の中では眠るのだから。そう思うと楽になった。ここ数週間困った睡眠習慣になっている。大学から疲れて帰ってきて、焼酎にトマトジュースを加えたものを飲みながら食事を終える頃は睡魔が襲ってきて、ソファーでウトウトする。小一時間で眠りが醒めてしまい、明け方まで眠れなくなってしまう。

それにしてもと思う。本当にこの地球はどうなっていくのだろうか、と。

数年前にいわゆる社会主義国が次々に瓦解していった時、多くの人々が思った。やはり人間の自由を束縛する社会は長続きはしないのだと。あるいは、社会的な富を共有できるほどに人は利口にはなっていないと、私もそう考えた一人であった。そして、いわゆる自由世界の勝利が声高らかに叫ばれた。しかし、本当にそうなのだろうか。いわゆる自由世界は人間の幸せに向かって歩を進めているのだろうか。

どうしてもそうは思えない。オウムの狂気を皆あざけり笑っているが、この狂気の集団を生み出す基盤が我が国の土壌で培われていった過程こそ目をこらして見つめていかなければならないのではないか。もちろん私自身も大きな口をたたけたものでないことは承知の上での話である。

九月のはじめの方の連休に五人の子どもたち、その三人の連れ合い、三人の孫が一同に会した。

旧盆に私が南米に行っていたために皆が実家に帰ることをひかえた。いわば遅れてきた旧盆である。とても我が家には泊まりきれないので懇意にしている蔵王温泉の旅館に宿をとった。原稿料などの雑収入の1年分が飛んでしまった。でも、私はいい気分であった。はじめて子どもたちを招待できたのだから。

酒が入ってからの話はよくは覚えていないが話題の中心は長男と次男は二人とも最近はじめたボクシングに関することが専らであり、四男坊は一緒に北海道からつれてきた友人と話し、五男坊は次男に身を寄せ、嫁たちはむずがる孫たちの世話に余念がないといった具合であった。

かなり、酔いがまわってきた頃に三男が「もう少し皆で話そう」といったが皆からよい反応が得られないまま眠ってしまった。

私はと言えばカリフォルニヤの大学に行っている五男坊が「また、卒業が遅れそうだ」と弱音をはいているのが何とも腹立たしく、精神論をくどくどと述べたてて、他の息子たちの応援を求めようとするのだが、彼らは自分たちの話に夢中で一向に乗ってこない。

それにしてもとまた思う。あのとき私も含めて家族の皆は何と自分たちの個別的な話に夢中であったことかと。彼らだってうすうすと、この地球が破壊される方向に向かっていることなどを感じているにちがいないのだが、だれもそのようなことは話題にのぼらせようとしなかった。

私の子どもたちだけではなく、若者たちにとってそういった話題は一般的にはダサイ話として嫌われているようだ。本当にこれで良いのかという想いがつのる。

「死んでいく人たちはいい。これから二十一世紀を生きていく者たちはどうしたらよいのか」とテレビドラマの作者は若者に言わせていた。あまりにもの出口なしの状況に彼らは途方にくれているとも見える。

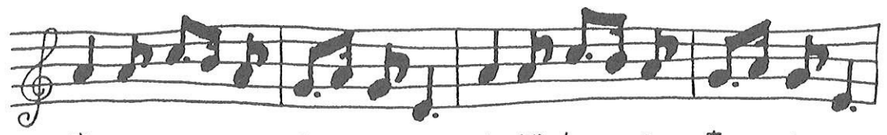
死んでいく者たちができるたった一つのことは、黙っていたら人間は地球をだめにしてしまうことを次代の人たちに訴えることではないか。

明け方になっても想いは廻る。大変だ、大変と。

温泉から帰ってきても、私は鬱々とし続けた。

それは五男坊に嫌味なことばをはき続ける結果となり、彼はとうとう爆発して冷蔵庫に鉄拳をくらわした。私もこらえきれずに彼に平手打ちをくらわそうとしたが、次男にブロックされてしまった。

すぐに治るだろうとたかをくくっていた右母指の捻挫はなかなかにしつっこく、こうして原稿を書いていても少しうずく。この痛みから目をそらさずにやっていけということかなと想ったりしている。



☆　☆　☆

クリスマス

小四　信一

クリスマスが来るのが待ちどおしくてなりません。

とくにすてきなイヴになりますように、心から願っています。

サンタクロースが来るのを待っているのです。

来て下さい！

お願いします！

サンタさん、今寒くなっているけど、がんばって下さい。

十二月二十四日の夜、待っていますから！

きっと来て下さいね！

☆　☆　☆

今年のクリスマス

中二　勇

去年は部活動もそんなに大変ではありませんでしたが、今年は厳しいのでクリスマスページェントの練習はあまり出来ないと思うけど、その分家でやります。

みんなが協力していいページェントが出来るようにしたいです。

ここずっと悪さをしてきて、心をなおしてから何カ月かが経ちました。今は心も落ち着いています。

イエス様が生まれたことを記念してお祝いするクリスマスに、心が落ち着いてきたことが嬉しいです。

年に一度のクリスマスを、みんなで楽しく出来たらいいなと思っています。

☆　☆　☆

クリスマス

小六　珠弥

今年のクリスマスは、何だか淋しくなりそうだ。

お兄ちゃんやお母さんと一緒にクリスマスを迎えられたら、どんなに嬉しいだろう。照子さんもいないし、何か周りがガラリと変わった、何か新しいというか、不思議というか変な気分になる。

でも、私の周りには、鷹貴君も恵理さんも、そして美季がいる。この中にお兄ちゃんが入ったらいいのにと考えてしまう。でも、何だかんだ言って楽しくやっている。

今考えると、お兄ちゃんも、さびしいのかも知れない。ここにいた時は、何人もの人たちとクリスマスを過ごせたが、今はお母さんと二人だけだからだ。私も早くお母さんたちと暮らせるように本当に神さまにお祈りしてがんばろうと思う。

☆　☆　☆

クリスマスのこと

中二　萌季

クリスマスはいつもたくさんの人と過ごしているけど、毎年同じコトをやってるんじゃ、何か面白くないです。

イヴはキャンドルサーヴィスとか、夜サンタとかで面白いけど、二十五日はちょっと・・っていうカンジです。

たまには友だちと過ごすのもいいんじゃないのかなーっておもいます。友人関係大切にしたいときだからだと思うからです。そりゃクリスマスの日はカップルがたーくさんいて、女だけじゃムナしいけど、面白いからGOODです。

家でみんなで過ごすっていうのも別にいいと思うし、交流を深めるチャンスでいいと思うけど、やっぱり大切な友だちと過ごしたいなーと思うこの頃です。

☆　☆　☆

クリスマスの日

小四　詩美

クリスマスには、やっぱりこれだな。プレゼントやケーキを用意して、お客さんをたくさん呼び集めて、すてきなクリスマスにするのさ。

天井に飾りをつけて、お客さんがすてきだな、と思うようにしたいな。

キャンドルサーヴィスが終わった後、ねている間にサンタクロースがやってきて、プレゼントをおくときに、あんまり起こさないでほしいな。

アドヴェントのクッキーも、かわいくておいしいのがいいに決まってるのさ。

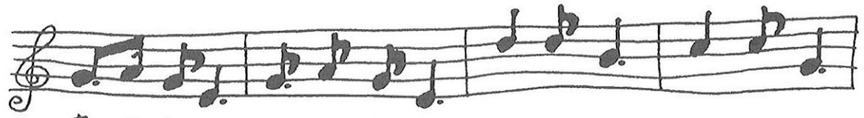
☆　☆　☆

クリスマスプレゼント

中二　亜季

私はクリスマスを待つ頃になると、やはりなんといってもサンタクロースがやってくるのを思いながら楽しみにしています。

イエス様がお生まれになったことをみんなで喜ぶのは、イエス様は神さまからのプレゼントだからなので



です。

私は、私のためにもイエス様がお生まれになりますようにって、お祈りもします。

クリスマスクランツに灯がついて、それがだんだん増えていくとクリスマスが近づきます。それを心待ちにしながら見るのがとても好きです。

サンタのおじさんは、今頃私のプレゼントを用意してくれているのだろうか、何て考えるのも楽しいです。

これまでのクリスマスも楽しい思い出がいっぱいあるけれど、今年は今までのものよりも、もっともっと楽しい、美しいクリスマスにしたいと思っています。

☆　☆　☆

父とクリスマス

中三　潔

クリスマスはイエス・キリストが生まれた日です。イエスは神さまがくれた救い主だと言われます。

だからみんなで楽しみ、みんなで祝うのでしょう。

しかし、僕は、今年のクリスマスは、楽しんだり、祝うような気分にはなれません。

なぜなら、父が十月の末に亡くなったからです。

少し父のことを書きます。

父は糖尿病で五十六歳で亡くなりました。

父は北海道爾志郡で生まれたといわれていますが、どこで生まれたのかははっきりしません。戦争中に生まれ、戦後の生活に苦しみながら一生懸命生きてきました。中卒で働きながら、高校、大学を出たのです。

父はとても優しく、僕のいうことをなんでもきいてくれました。

僕は、父が、〝もうそろそろ死ぬ〟と感じていました。

今年に入って二回入院し、たばこ、酒など止めようとしませんでした。

九月に父と、実家に帰ったとき、父は、自分のこと、姉たちのことなど初めて聞くようなことをいろいろ話をしてくれました。これまでこんなことを、こんなに話をしたことがないのに、どうしたんだろうと思っていました。

死ぬ二週間前頃から、よく僕の所に来ていました。

父も、自分がそろそろ死ぬ、と分かっていたので、言葉ではそんなことを言いませんでしたが、僕のいうことをよく聞いてくれるようになり、僕の所によく来てくれたのではないだろうかと思っています。

イエスキリストは、私たちの祈ることや願うことをなんでもかなえてくれるそうです。

もし、本当に、イエス・キリストや神さまがいるのなら、父を生かして返してほしいと心から思います。

クリスマスプレゼントは、ものではなく、生き返った、とても優しい父と会いたいと思うのです。

☆　☆　☆

私のクリスマス

中三　紅子

今年のクリスマスは心を天使にして過ごしたいと思っています。

今年は高校受験がありますが、負けないように心を強くして過ごしたいです。受験は、今の私にのしかかっている重たい荷物ですが、しっかり背負いつつ、クリスマスを楽しみたいと思います。

勉強は嫌いではありませんが、そんなに好きでもないので、たまには嫌気がさすこともあります。しかし、何とか負けないでがんばって受験を突破して高校生になろうと思います。クリスマスは、そんな勉強のご褒美の日としたいので引き続きがんばります。

クリスマスには面白い本がほしいと思っています。

今の私は、数学が出来るようになる脳味噌と、暗記力がほしいのも本音だけれど、それは自分で努力して創るしかないので、一番ほしいのは本です。

世界にある本の中で、これまで鼻息で吹き飛ばせるぐらいの本しか私は読んでいないの、もっともっと読みたいと思っています。

本をたくさん読めば、私のような者でも、少しは心細やかになれるような気がします。

もし神さまが与えて下さるならば、集中力と忍耐力が欲しいです。勉強がずっと続けられる集中力が欲しいです。忍耐力は、苦しみにも、寂しさにも、悲しさにもへこたれないでいたいからです。

今年のクリスマスは、とにかく『勝つ』「受験」の二字に潰されず、受験を理由に、クリスマスをつまらないものにしたくないので、負けません。

☆　☆　☆

プ・リ・ズ・ム

光の中で

佐藤家

メリークリスマス！
クリスマスの祝福とよいお年が参りますように！お祈りします。

「普通の家だったら、絶対許してくれるよ！」
夜、十時をまわって帰宅してきた加津子を叱ったときの一言です。
「よその家だって、子どもが心配だったら叱るわよ。」と答えた私ですが、「普通の家だったら」という言葉に子どもたちと私の意識の差を痛切に感じます。
「普通の家」に拘るより伝えるべきことを伝えようという私と、その度に“「普通の家」だったら…”と頭の中で繰り返しているであろう彼女たち。自分の好き勝手にできるのが「普通の家」と考えてしまう彼女たちの考え方は、とても現実離れしています。が、よその家でも、その家なりの生活のルールがある事を知らないのは、とても哀しい事実です。
それ以上に、心配しているから言っているのだ、ということが、日常的に伝わらないこと、本当に伝えたいことが伝えられないことに何とも言えない思いがします。
その夜、彼女の枕元で、あなたをどんなに大切に考え、心配しているか話して聞かせました。言葉で伝えなければ確認できないのも、哀しい思いがしますが、涙をこぼしながら頷く彼女に自分の働きを思います。
やらなければならないことの多さと出来ないことを自覚させられる毎日で、ここに私が存在していることの意味をも考えさせられます。クリスマスを前に、思いをより深めていきたいと思います。　岩崎　まり子

子どもたちの季節

仙道家

クリスマスの祝福をお祈り申し上げます。
わが仙道家は、〝女系家族〟である。子ども九名のうち、男子三名。職員も保母三名に男子指導員は一名であり、頭数でも力関係でも女子が上位なのは必定である。
日常的にも、男の子が女の子に追いかけられ、「助けて～。ごめんなサーい。」と絶叫しているのである。（もっとも大概男の子の方が先にちょっかいを出しているのだが・・）
ちょっかいを先に出せば、相手の気が済むまでやっつけられてしまう、ということを何度も体験し、学習してきている筈なのに、今日も、高一の鷹貴が小六の悠子にちょっかいを出して、追いかけられてやっつけられているのである。
指導員の村上も同様である。
こちらは、具体的な動きではなく、小賢しくも〝言葉〟によるのである。
我が家の長女で中三の紅子にいわせれば『ひと言多い』のである。
「もう、村上さんは！」と、女の子たちの集中攻撃、いや口撃を受けて撃破されてしまうのだ。
村上はくやしまぎれに、「そうやって、コミュニケーションをとるきっかけになれば、と思っているんです。」などと言い訳も小ざかしい。
高一の鷹貴、小六の一志、小五の環なども、案外そうなのかも知れない。村上指導員をしっかり見習っているのだろう。
よく見ると、女の子たちに反撃されている彼らは、どこかしらその表情に嬉しさが漂っているのだ。
コミュニケーションのきっかけと言っても、ちょっかいを出すだけでは飽きられてしまうのではと心配である。ガンバレ男の子！池田　祐子

原田家日記

十月二十九日。潔の父の突然の訃報が飛び込んできた。担当して四年目になるが、潔のことよりその父への対応に戸惑った初めの頃。揺れる思春期、不信、不満を一気に表現しはじめた中三の今、受験を控えたこの時やっと潔への対応の方に悩み始めたこの時に、父は逝った。何かあるとすぐかけつけて下り、いつの間にか私の良き相談相手になって下さっていた。そんなことを意識してから、ひと月にも満たない。「潔、いるかい？」と、今でも玄関から入ってきそうである。いつもの通り、予告もなしに。来ないと会えなかった父は、今、いつでも潔のそばにいる。力強い父の後ろ盾を失った悲しさと寂しさは、自立への道に確実につながっている事だろう。そのためのきつい一歩を今踏み出そうとしている。
十一月三日。二階の一室に卒園生三名が雑魚寝。申し合わせた訳ではなく、明日の「感謝の集い」を手伝おうと帰ってきたとのこと。何やら楽しそうなおしゃべりは、明け方まで続く。
十一月五日。ダイニングルームでくつろぐ十六歳のセリフ。『普通の家を、めざす』っていってもさあ、この家が普通なのは家だけじゃん。夜、出かけられないし、遅く帰るとすぐ怒るし・・・。普通の家は遅く帰っても怒られないよ。泊まってもいいし。」
先日もある子どもが言っていた。「普通の家って、欲しいって言えば、お小遣いくれるんだって」「今の普通の高校生は、私以外みんなポケベル持ってるよ」
何から何まで、自分の都合のいいように「普通」を解釈し、うらやましがる子どもたち。「私も普通の子でいてほしいと思っている」と答えにならない答えを返しつつ、普通であることを理解することの難しさを思う。
「社会」に出すまでの課題に追われている。　竹花　信恵

河のほとりで

旗井の家

クリスマスおめでとうございます。皆さまと友にクリスマスの豊かな祝福をお祝い申し上げます。
数年前までの私は、買いもしない宝くじの1千万円もが当たらないかな～、などとあつかましくも、何かいいことないかなーと、〝いい事〟を消極的に待つ姿勢だった。
しかし、ある日ふと気がついた。〝幸せは歩いてこない、だから歩いていくんだね〟まさに〝いい事〟は先ず、自分が動かなければ、そう簡単に向こうからはやってこないのだ。
そして、毎日の生活の中には小さいけれどたくさんの〝いい事〟のあることも分かった。
私の作る食事を子どもたちがおいしいと食べてくれること。私の干した布団を子どもたちが気持ちいいと感じてくれること。私をこんな気持ちにさせてくれたのは誰でもない四人の子どもたちである。
十月は私の誕生月である。
十月になると亜季が「倉ちゃん誕生日プレゼント何がいい？誕生祝いには何を作ってほしい？」と聞いてきた。昨年の誕生日には女の子たちがカレーライスとサラダを作り、男の子たちは小遣いを出し合ってコーヒー好きの私のためにコーヒーメーカーをプレゼントしてくれた。
しかし、誕生日が過ぎても何の音沙汰もなく、今年は何もなしか・・と、諦めていた。すると、2日過ぎた日に、やはり亜季が、「はい、倉ちゃんの誕生日カード」と、手作りのカードを渡してくれた。カードには担当している四人の子どもたちのメッセージが詰まっていた。
美味しいご飯をありがとう。倉ちゃんはとても美人です。（主観だらけですが・・）そして極めつけは嬉の、いつもガミガミ言っている倉ちゃんを見ていると若いなー強いなーと感じ吹き飛ばされソーな勢いです。というメッセージ。この子どもたちからの贈り物は私にとって大きな大きな〝いい事〟となった。
今、私のポケットの中は、子どもたちからもらった〝いい事〟でギューギューである。　倉沢　智子

現場から

のびやかに ふくよかに Ⅸ

笹山 恵理

午後四時。素早く暮れていく冬の日を追うように、長くて寒い小学校からの道のりを息を弾ませて六年生の珠弥が帰ってきた。みんなのいるダイニングにやってきて用意されたおやつを食べる。育ち盛りの真っ直中はおなかのすきようも相当である。学校での出来事をおしゃべりしながら冷蔵庫を開けて見るのが珠弥の習慣である。そうそういつもおいしいものが出てくる冷蔵庫ではないのだが、開けて見ないと落ち着かない。今日は何があるのかな・・と、ウインナーソーセージを発見。食べてもいいかをしっかり確認して、フライパンを持ち出して調理にとりかかった。ジューっとよい音とその後に香るよいかおり。お皿に盛ってみんなに回してパリッパリッとほおばる。後片づけも完璧にして、ちょっとリッチな珠弥のおやつタイムでした。

午後六時三〇分。夕食時。私が気合いでつくった本日のメニューはドライカレー。見栄えは今一つだが、この味こそは・・と思い入れをしていると、「何これ味がない。恵理さんが作ったんでしょう。」とするどい指摘。しぶしぶ認めると、「やっぱりなー、だいたいソーだよ。しじみ汁にお酒をちょっと入れるといい味になることも知らなかったんだからナー。」私の料理下手を細かに口々に指摘してくれる・・モウ!。

「でも、ずーとやっていればいつかはうまくなるよ」と、他の子どもたちがフォローしてくれた。アリガト、君たちを踏み台にしてがんばるよ。うまくなる日まで待っててね。

夜も九時。勉強会から帰った中二の渓子。こちらもまた育ち盛り。六時半の夕食から三時間ほども経てば、もうおなかはぺこぺこ。ダイニングにきて、「勉強するとおなかすいちゃってサー。」とか何とか言いながら、食パンを切り、トースターで焼く。冷蔵庫からマーガリンを取り出して、アツアツのパンにたっぷりマーガリンを塗って、サクサクとおいしそうに食べる。終わらぬ宿題でまだ寝ていなかった小六の悠子もつられて、寝る直前というのにパンを食べようとする。それを藤本保母が少々苛立ちながら心配して、「胃がもたれちゃうよ。」と声をかける。「胃がもたれても意味ナイじゃん。」全く無意味な返事をして、藤本保母の心配をよそに、おいしそうにパンを食べてにっこり。

仙道さん家の食生活のほんの一場面。どれも、どうということはないのだけれど、よくよく考えてみると一つ一つに意味がある。

先日、ある研修会に参加した。養護施設の今後のあり方を探るという内容のものだった。研修会では養護施設に情熱を注ぐ方々が多く集まり、たくさんの言葉が語られた。その言葉の一つ一つは考えや悩みなどの結晶のように意味深いものだった。中でも、私たちがめざすべきものを示してくれた印象に残る言葉があった。

『子どもの権利として、普通の家庭を失った子どもたちなのだから、その代償となる普通の生活をより多く与えなければならない。』このような言葉が真剣に語られるほどに、普通の家庭を失った子どもに、普通の生活の獲得は困難なのだろう。普通の生活・・当たり前の生活経験。

『家庭サイズの暮らし』という言葉を光の子どもの家の職員会議の場などでよく聞く。食生活でいえば、各家に台所がついていること、一緒に暮らすものが食事を作ること、自由に明けられる冷蔵庫があることなど〈家庭〉では当たり前の一つ一つを、同じように経験できるようにとのこだわりが、ここにはある。出来るだけ多くの〈あたりまえ〉が、生活の中に当たり前のように散りばめられている。

でも、それは決して当たり前に手に入れられたものでなく、子どもたちに当たり前を経験させるべきだという強い意志によって勝ち取ってきたものなのだろう。

私は、光の子どもの家の職員のひとりとして、当たり前を意識して、感謝していこう。

そして、当たり前でない部分が、より当たり前に近づくように努力していくことを〈子どもの権利を守るため〉という大層な言葉をつかってではなく、当たり前に求めていけたらと思う。このようなことを求めたいと思うことの出来る光の子どもの家で、よりよい暮らしと成長を子どもたちとしていこうと強く考えた、仙道さん家の食生活の一場面だった。

そして、何よりも、この当たり前の生活が散りばめられた光の子どもの家の生活は、たくさんの方々のお励まし、お支えによって成り立っていることを思わずにはいられない。感謝しつつ大切に暮らしたい。

養護メモ 64

家族 その十九『情緒18』

菅原 哲男

東斗丸は東大宮教会のCS（教会学校）の中学科にやってきた。何となく頼りない今風の素質だけで構成されているような若者であった。うつむき加減に背を丸めてボソボソと消え入るように話した。

CS教師が、彼が都内の有名市立大学付属中学の生徒で長いこと登校できないでいることを聞き出し、三人兄弟の末子で、幼い頃母を癌で失って父親と長兄とで郊外都市に住んでいる、などの情報を得、CS活動の一つとして熱心に関わり始めた。

わたしたちの熱心な応援者である永野三恵氏が彼の中学二年生の誕生祝いに「本がほしい」といわれたことがきっかけで彼との関わりが新たに始まった。助けの必要な子どもを見過ごしに出来ないことでは私たちが見習わなければならない永野氏の、それからの彼との関わりは驚くばかりの精力的なものであった。

私を誘って彼の家に父を訪問し、養育のこと、教育のこと、将来のことなどについて考え合い、今、少なくても斗丸が子どもらしい暮らしをするために私たちは力を惜しんではならないことなどを話し合った。

そんなことから、中学三年生の十一月に、光の子どもの家で生活をやり直し、学校に通い、卒業して通信制県立高校に入学した。父の態度変容もあり、高校一年の五月末に家庭復帰となった。その後、訪問して関わり一～二ヶ月はこともなく過ぎた。

しかし、父との関係が再び悪化し、夏休み前に家出を繰り返すようになり、また永野家が休息の場になった。

そのうち斗丸は中学時代の友人の紹介で東京の鮮魚卸市場で、夜間のアルバイトをするようになった。

大学の研究所にお勤めで、疲れて帰ってくるご主人が、当然のことだが斗丸に比較的厳しく対応された。斗丸に、父の家に帰って生活を立て直すことをすすめ、泊めおくことは出来ないと、申し渡しもした。斗丸は、ご主人が出勤された後、永野氏が出かける前に永野家の玄関に立ち、眠らせてほしいと懇願する、ご主人との板挟みに悩みながらも、一睡もせず憔悴しきった斗丸を追い返すも出来ず、これで斗丸に失敗をされたらご主人との関係も悪くなることなどを言い渡し厳しく約束をして、出かける日を繰り返していた。

その秋、思いあぐねた永野氏は、斗丸の高校のカウンセラーにことの次第を話して相談をした。そこで、永野氏に、彼が自立するためには永野氏の善意や思いやりなどが最も障害になっている。彼を受容する一切を中止すべきであると申し渡された。永野氏は、大いに混乱した。

ある日、斗丸が夕食を終えて、昼に借りてきた本数冊を返しておいてくれ、と言って、ご主人が帰られる前に仕事に出かけようとした。途中で返すことが出来るのでそうするように永野氏がいうと、彼は腹を立て、やってくれてもいいじゃないか、くそババァ!、と怒鳴り玄関を出ようとした。永野氏は追いかけ、本を手に持たせ、これぐらい出来なくて何ですか、と彼を諭して玄関に戻った。

彼は、荒れ狂い、玄関の郵便受けを蹴飛ばして悪態の限りを尽くした。

永野氏は、「そんな物言いをして、何ですか、私はあなたの何なの!」と言った。斗丸がいった「オレが楽するために利用しただけさ!」と、毒々しげに言い放った。その時、永野氏は、これで斗丸と決着できる、と、学校カウンセラーの言葉を思い返しながら思っていた。

それでも数日後には、斗丸にとってこんな決着がよかったのだろうかという思いが胸を締め付けていた。

一カ月ほどが過ぎて、斗丸から電話で、「オレが悪かったんだよー、わかってるよー」と謝ってきた。

それをきっかけに永野氏との関係が回復し、今は郊外の洋服チェーン店に職を決めに行ったまま沙汰のない斗丸の連絡を永野氏は待っている。

ポツリと、私の家も決して快くはなく、どこにも安住の地のないことを痛いほど知っている、そんな斗丸が生きていくために、出来る利用はされようと、この頃思えるようになりました、と、遠藤周作の『沈黙』の結末を引用して言うのであった。

父と斗丸の葛藤や破綻、斗丸と永野氏のやりとりは、斗丸が早くに失った母への甘えを、永野氏の受容に徹した情緒的関わりが代替し、家族的な関係を形成している。今後のこの国の新しい家族像の一例といえる。

悼　佐藤　信　先生

佐藤信前理事が九月二〇日癌のために静養先の軽井沢の別荘でご逝去されました。心から哀悼の意を表します。

先生は、光の子どもの家の設立準備の役員、法人理事として草創の労を病と闘いながら担われました。

私事ですが、先生と私立のミッションスクールの夜間部で出会いました。十七歳の時でした。先生は、そこからの報酬の全てを夜学生の夜食や学費の補填などに供されました。

理数系が好きだった私を、勤めておられた大学の研究室で、受験のご指導から学費のご心配まで頂きました。また、先生の大学に助手として引き上げて用いて下さり、私のこの世の最初の仕事と、最後の仕事になるであろう『光の子どもの家』に関わって下さいました。

私は何一つご恩を返せない最も不肖な弟子であります。この上は、先生がなさったように、子どもたちの真っ直ぐな成長のために役立つことでご報恩とさせていただきます。

祈平安。　施設長　菅原　哲男

日誌抄　＝暮らしの風景＝　1996年 8月1日 ▶ 9月31日

8月　幼児５名（幼稚園１名）小学生１０名　中学生１０名
高校生５名　在籍総数３０名　（男１６、女１４）

1日　高校生の職場実習をお願いして毎年ご協力の割烹『萬屋』さんより、今年も土用の鰻を！。感謝。

4日　日本キリスト教団東大宮教会学校の夏期学校が赤城山荘で。１０名の小学生４四名の幼児が参加。

10日　この日よりお盆帰省。家庭訪問による調整をしっかりしての久しぶりの父母宅へ年に一度のご挨拶など。

12日　家庭に帰ることのできない子どもたちの行事で伊豆下田市の木部キヌ子氏宅（木部すなお保母の実家）および湯河原町の府川勝臣氏宅の離れをお借りしての海水浴の２泊３日。美しく楽しい思い出が。感謝。

16日　無断外出中の高校生が３週間ぶりに仙道家に帰る。

17日　無断外泊から帰った高校生を連れて村上指導員が施設長の実家の秋田の盆踊りへ。

○　東大宮教会員の土井氏よりテーブルセット川栄氏よりグローブ、サッカーボールなどをいただく。感謝。

20日　無断外泊が続いた高校生加須署へ出頭し無断外泊中の反社会的行為を告白。

○　母の実家へ帰省の田中兄弟を引き取りに宮古市へ担当者と施設長が。

21日　所沢児相・浦和家庭裁と高校生の今後について協議。

22日　ＮＴＴ久喜市店のご招待で人形劇へ。ファンタジックなひととき。

26日　女子聖学院ＣＣＦ４名来訪して草取りご奉仕と、語り合いと祈りと礼拝の二日間。ありがとう！。

○　江森ヘヤーサロン散髪ご奉仕を、今月も。感謝。
タカラブネさんよりお菓子を

27日　町内弥兵衛の平井氏より生活用品をたくさん。感謝。

30日　さよなら夏休み大パーティ。高校生などの不祥事があったことから自粛して、出来るだけ質素に、そして実質的に二学期の目標を確認。

9月

2日　２学期始まる。元気に。

6日　明治学院大学の北川清一教授が来訪。一泊して懇談と講演の現任訓練を。親しみと刺激の２日間。

10日　関東学院の演劇サークルが来訪して上演。文化の香りをいっぱいの感動の一夕を一泊して。

14日　加須市のボランティアグループしずくの会の井手氏お米とお菓子をたくさん。ありがとうございます。

20日　設立準備の時より体の動くぎりぎりまで役員・理事を任じられた佐藤信前理事ご逝去。

24日　町内旗井の鎌野泰章氏より衣類をたくさん。感謝。

26日　光の子どもの家後援会役員会。

26日　佐藤信前理事のご葬儀が日本キリスト教団信濃町教会にて。参列して弔意を表明。

反射光

☆佐藤信先生の思わぬご逝去。心から先生のご生涯に敬愛の思いを深めます☆それにしても、彩福祉グループの不祥事は何とも仕方のない暗さを思います。これまで制度など何もなかった昔から営々とその身を削り、血を流し労を惜しまなかった先人たちの遺産を蹴散らし、それでも足りないほどのマイナスイメージを塗り込めてくれました☆監督官庁との緊張を喜ぶ福祉人は多くはなく、出来るだけスムースに事を運びたいのは当然のことで、そこがこの事件の原点だったと思います☆行政は、私たちが自前で定員外職員を確保したり、措置費の不足分を補充することを快く思いません。彼らはいつも充分な手当をしていると思うのです。しかし、どう考えても公の費用で子どもたちの充分な養育に足りるはずがありません。最低基準という基準での公の保障なのですから！☆これまで創ってきた監督官庁などにおもねずに、よい意味での緊張関係を今後も維持するために、乞う、更なるご支援を！（哲）